

## **【震災支援】**

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト報告



## 「Do for Smile@ 東日本」活動3 地域縦断スタディツアー

### 【スタディツアーの概要】

岩手県大槌町、陸前高田市そして宮城県気仙沼市の3カ所で学生は熱心に活動しているが、他の地域の状況や学生の活動を学び自分たちの活動に活かしてほしいとの狙いから、前年度末の2014年3月19日～21日、1泊3日の「弾丸ツアー」を実施した。9名の学生が参加した。

### 【岩手県大槌町】

吉里吉里中学校で学生メンバーの学習支援活動を見学後、おらが大槌夢広場の皆さんに町をご案内いただいた。その後、吉祥寺を訪問。震災前の番地で並ぶご位牌に「震災前の町並みがある」という高橋英悟住職の言葉に、失われた命や町並みだけでなく生きのびた人々への想いが溢れている気がした。

### 【岩手県陸前高田市】

陸前高田では、津波の被害をうけた沿岸部の面積の広さや、内陸部でも気仙川をのぼってきた津波の威力に学生は驚いていた。翌日ガイドの方に市内をご案内いただき、箱根山にある気仙大工左官伝承館では神戸から分灯された「希望の灯り」などを見学した。伝承館のガイドの方が箱根山から海や町を震災当日見ていたお話などうかがったとき、震災体験はいろいろ聞いても「慣れる」ことはないと感じた。

### 【宮城県気仙沼市】

リアス・アーク美術館で「東日本大震災の記録と津波の災害史」を見学。学芸員の方の詳細な記録や、目の前の被災物に圧倒された。その後、震災直後から支援を続けるピースウィンズ・ジャパン東北事業責任者・角免昌俊さんのお話をうかがった。「いつまで活動を続けるべきか」など質問しながら、学生たちが自分たちの活動のあり方を模索しているのがうかがえた。



ピースウィンズ・ジャパン角免さん（写真奥左から3番目）を囲んで

### 【ハプニングと今後のリスク・マネジメント】

2グループに分かれバスで東京に戻る予定だったが、気仙沼で雨が雪にかわり、市内では停電・倒木などが発生、第2グループが乗るバスが来ない事案が発生した。急きょ、気仙沼駅前のホテルを確保した。ふだんは活動中に（とくに津波をとまなう）地震が発生したり急病人が出た場合のリスク・マネジメントを講じていたが、このような場合に備えることも大事だと実感した。

(中原)

## 4年目の大槌復興支援活動

### 過渡期の復興支援

2011年3月の東日本大震災発生から3年が経過した2014年度は、大槌町内における盛り土工事に伴う町内の変化、活動立ち上げメンバーの卒業を控える状況での新たなリーダー育成などに取り組む、活動の移行期となった。大槌町市街地では2014年2月から、吉里吉里地区においては6月から本格的な盛り土工事が開始した。これに伴い、震災後まちのにぎわいの拠点となっていた仮設食堂や店舗の多くが立ち退きを迫られ、工事車両が絶えず行き交う砂山の風景となった。復興過程における計画的な大規模工事とはいえ、生活環境の後退は住民に多大な負担がかかっているように見えた。「復興の踊り場」ともいえる期間が長期化するなかで、地域課題が複雑化し、学生の役割が見えづらくなるなか、自らの活動の進路を定めていくにあたり苦悩していた場面も見られた。ボランティアセンターの学生の状況についても、震災直後大槌入りしたメンバーはすでに全員卒業し、また緊急支援期から関わる4年生も今年度末卒業を迎えるなか、新たなリーダー層の育成に積極的に取り組んだ。様々な課題に向き合っている毎日ではあるが、結果として今年度は年間の活動人数としては過去最多となるのべ289人の学生が大槌に訪れて活動した。そのなかでも、今後活動の中心となる1、2年生の54人が新たに加わってくれたのは大きな力になると期待する。

本活動ではこれまで小学生の遊び場づくり、中学生への学習支援、地域の復興の歩みや歴史・文化のアーカイブ化活動、地域コミュニティ支援、薪プロジェクトの5つの活動（詳しくは36～38ページ参照）を実施してきたが、今年度はひとつの集大成として、「吉里吉里カルタ」の制作に取り組んだ。大槌に繰り返し訪れる学生は、この地域が「震災で様々なものを失った地」ではなく、「貴重な歴史や文化、生き生きとした人が集う豊かな地」であると理解を深めていった。その結果、地域の伝統や海にちなんだ生活風習を記録し、地域社会に残していく活動を見出し、またカルタとして5、7、5のリズムにのった句にのせることで、楽しく生活に溶け込む素材として活用されることを目指した。このカルタはこれまで活動を支えてくださっている地域のみなさまへの活動報告と感謝を込めて開催する「第2回明学生からありがとうを伝える会」のカルタ会で地域の皆さんに手にとりいただき好評であった。カルタを囲んで、地域の世代間交流が生まれることを期待したい。

### 震災から4年を振り返って

東日本大震災から4年が経ち、学生の入れ替わりがあるなかで、大槌を訪れている学生であっても、活動の経過について詳細に理解する学生が少なくなっている。ここで活動の枠組み、学生の参加状況を記述的に整理をすることで、活動がどのように成り立ち、さらにその影響がどう広がっていくか理解を深める手がかりにしてほしい。

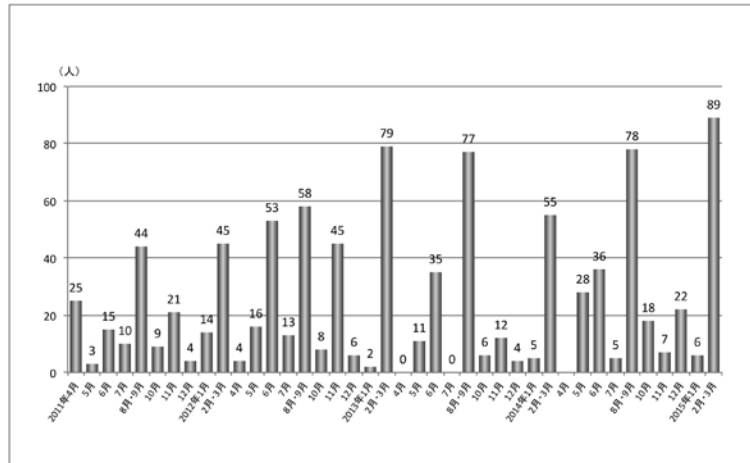
## 大槌町との協力関係

本活動は2011年4月に大槌町教育委員会から本学への学校再開支援（震災で機能不全に陥った小中学校の授業再開に向けたサポート）の依頼からはじまった。緊急支援として3期に分かれて訪れた学生は、被災した学校からの机・いす等の備品の運びだし、物資整理などの学校サポート、避難所の子どもたちとの遊びや引っ越しなど、住民に近い立場で活動を進めていった。この緊急支援期のメンバーだった当時の学生は「私たち学生にできることは、まちの復興工事とかいう大きなことではなくて、住民の生活に近い、日常の延長にある小さなことなのだ」と、住民への聞き取りを通して理解をしていったという経験談から分かるように、大きな活動ではなく、むしろ「小ささ」にこだわった活動であった。地域に近い距離で活動を進めていくなかで、避難所のリーダー、学校や保育園の先生、PTA などとの関係が生まれ、そうしたキーパーソンとの協働により、5つのプロジェクトが動きだした。そして活動をさらに持続的なものにするために、2012年3月に明治学院大学と大槌町は協働連携協定を締結した。

こうした大槌町と大学の組織的な協力関係をもとに、2012年4月に、初めて吉里吉里の中学生が修学旅行で来校し、さらには2014年2月には大槌町と大学の協議会を開催することで、変化する地域課題に応じた協力関係を築いてきた。2014年8月には、大槌に関わる大学が協力して「大槌大学文化祭」(38ページ参照)が開催され、より開かれた形で大学と大槌町のつながりが作られたことは画期的なことと思う。来年度はこの文化祭が大槌高校で開催され、高校との連携強化が予定されていることから、大槌に関わる大学の多様な資源が有機的に地域に生かされ、復興の大きな力となることを期待したい。

## 学生の参加状況

震災直後からの学生の参加状況を34ページにグラフで示した。夏と春休みの期間には、平均5日間程度の活動をおこない、授業期間中には土曜日と日曜日の2日間（金曜日の夜行バスで出発し、月曜日の朝東京に到着）をほぼ毎月継続的にこなっている。2014年の夏期は78人、春期は89人という震災後最大の参加学生数となった。また、現地訪問回数が10回以上の学生が21人、5回以上が18人という数字からも、学生の定着率の高さがうかがえる。継続的な活動となる背景として、学生の意識や地域の受け入れ状況など複数の要因があると考えられるが、センターがリフレクション（ふりかえり）を構造化して位置づけていることも影響していると考えられる。



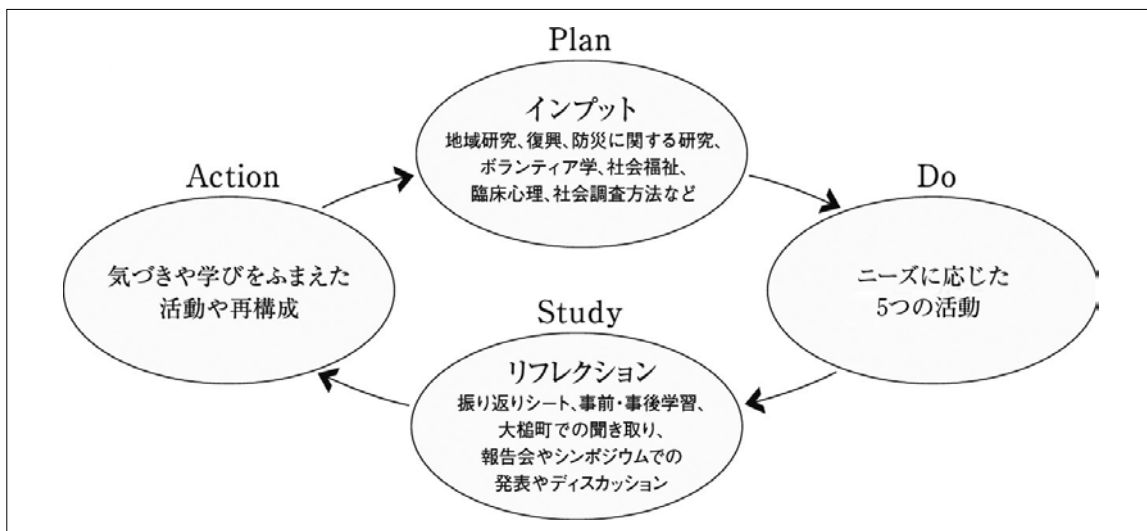
表：参加学生の状況（2011年～2015年3月）

### 復興支援と学びをつなぐ“リフレクション”

本活動では、リフレクションを、Plan（計画）、Do（5つの活動）、Study（省察）、Action（改善）というPDSAサイクルの循環的な学習（図1）として構造化している。

これにより、学生は活動の意味を社会的な文脈で位置づけ、自らの専門性と関連させながら考察するとともに、地域社会の一員として生きているという意識を次第に深めているのである。

図1 循環型の学習



### 活動が地域にもたらした影響と課題

本活動が地域にもたらした影響については、大槌復興支援に関わる「Do for Smile @東日本プロジェクト 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム活動の軌跡報告書」で詳しく述べているが、震災で学ぶ意欲が低下しがちな中学生への学習意欲の向上や多様な進路への関心の拡大、子どもたちへの遊びを通じたストレス発散の機会などについては、アンケート結果からも効果があったと推察できる。

さらに復興のシンボルとなる吉里吉里大運動会の復活や地域の象徴である祭りの継続に学生が一役を担うことができた。

#### 資金的サポート

震災から4年を迎えようとしている現在、長期化する活動が展開できる背景には、多様な機関から資金援助によるところも大きい。学外からは住友商事東日本再生ユースチャレンジプログラム、電通育英会、赤い羽根共同募金「ボラサポ」、日本ユニセフ協会、ソニーマーケティング学生ボランティアファンド、Gakuvo Stytle Fund、(財)学生サポートセンターの7機関から活動支援を受けた。また学内からは、大学保証人会や校友会、明治学院同窓会、学内募金など、卒業生、保護者、教職員などからの手厚いサポートを受け、活動が進められている。こうした支援のもと、継続的に活動をしていけるよう責任を果していきたい。

#### 今後に向けて

仮設住宅での生活が当初の3年から5年に延長される等、未曾有の大震災後の復興は決して順調ではない。震災後の惨状を目の当たりにしていない新たな学生も目的意識をもって活動に取り組めるような学習や活動の場づくりへの工夫がさらに必要とされる。さらに、大学のある首都圏等でも震災の危機が迫っているなか、東北の被災地での経験と学びを足元となる地域づくりに生かしていくことも重要な課題である。今年度は白金キャンパス近隣で、行政や住民と協力した防災の取り組み(70ページ参照)に着手したが、継続した取り組みとされるよう努力が必要である。学生たちは、たとえば留学先のアメリカやイギリスやフィリピン等の世界各地で、東日本大震災の惨事とそれに負けずに向き合い続ける人々の営み、震災の教訓等を伝えており、またアメリカやイギリスの協定校の留学生も毎年大槌の活動に参加してくれている。

東日本大震災という人びとの記憶に強烈に刻まれた出来事への関与をきっかけに、共生の営みへと続く活動を今後も絶えず取り組んでいきたい。

(市川)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム～

2011年4月から始まったこの活動は、これまで418日、104ターム、のべ968人の学生が岩手県大槌町で支援活動に取り組んできた（2015年3月までの予定を含む）。そのうち、今年度の参加学生数は289人となり、過去最多となった。2014年は、大槌町との協議会や大槌大学文化祭など、行政や他大学と連携して活動する機会が増え、復興に向けてさらなる協力関係を深めつつ、自分たちの活動を見つめなおす時期であった。特に、昨年度までの「震災復興支援活動を通じて築く『笑顔』循環型社会の実現～吉里吉里は復興し、学生は成長し、大学は社会に開かれる～」という活動目標を基に、「震災によって壊れかけた社会基盤の再構築をサポートする」という理念を1,2年生が中心になり考えた。さらに、これをもとに、プロジェクトごとにミッションを再確認した。この理念を掲げ、今年度の活動に臨んだ。以下は各プロジェクトの報告である。

<p>わんぱく広場 私たちは震災の影響で遊び場を奪われた子どもたちに安全な遊び場を提供している。吉里吉里小学校の子どもたちを対象とし、多い時には50人以上の子どもの参加がある。わんぱく広場は子どもたちのストレスの軽減、子どもや高齢者の世話をしなければならない保護者へのレスパイトケアを目的としている。最近では保護者からの学力向上のニーズに合わせるため吉里吉里公民館が主催するサマースクールの手伝いをした。これは子どもたちの体力と学力の向上が目的である。プールで一緒に泳いだり、学校の宿題を教えたりし、全員が宿題を終わらせることができた。震災から時間が経ち、私たちに求められるニーズが学習面へと少しずつ変化している。子どもたちの笑顔や元気な姿を力にし、地域の方のニーズに沿ったわんぱく広場を開催したい。</p> <p>(心理学部心理学科 学生)</p>	<p>学習支援活動 私たちは吉里吉里中学校において「たくさんの人と関わることで色々な価値観があることを知り視野を広げて欲しい」との思いで活動をおこなってきた。具体的には勉強が苦手な生徒を対象にした学習会の実施と、学校生活に介在し1日ともに過ごす授業サポートの2つを活動内容としている。今年度は学校との連携がより強化され、9月の授業サポートでは本格的に部活動へ参加させていただくことができた。さらには3年生が修学旅行で本校を訪問するなど、よりよい関係を築けているように思う。震災から4年が経過しようとする今、私たちに求められることは変化してきている。生の声を積極的に聞くためにアンケートの実施などを通してニーズの再確認をおこない、来年度は今までの枠にとらわれない柔軟性を持った学習支援活動を展開していきたい。</p> <p>(経済学部国際経営学科 学生)</p>
---	--

<p>地域コミュニティ支援 仮設住宅支援から始まったこの活動は、現在は復興公営住宅や家へ移り住む方々が増えて行ったことに対応し、地域コミュニティ支援として新しいニーズに対応すべく活動をおこなっている。当初は仮設住宅に住む方と家が残った方などの繋がりを作る媒体となることを目的としていたが、現在では、地域の人と人とのつながりを強める助けとなることを目的とした活動である。今年度の夏活動では変化に対応し地域のニーズに合わせる形で活動をおこなった。具体的には、震災後おこなわれるようになった御霊祭運営や震災により亡くなられた方々へのメッセージが込められた灯籠流しのお手伝い、サマースクールへの参加、そして震災を経験された色々な立場の方々に震災や復興のお話を伺った。今後も地域の方々に寄り添った活動をしていきたい。</p> <p>(国際学部国際学科 学生)</p>	<p>薪プロジェクト 薪プロジェクトの主な活動は、林業や地域復興に携わるNPO吉里吉里国の作業補助である。私たち学生は「人と自然の架け橋になる」を活動目標に掲げ、具体的には薪割りや間伐材の収集、木材を使用した交流活動の補助等をしている。今年も薪を生産する作業を中心に活動をおこなった。8月には夏期休暇を利用して計6名の学生が約3日間滞在し、汗を流した。昨年度よりNPO吉里吉里国の雇用体制の整備、拡充がおこなわれ、それに伴うニーズの変化に対する私たちの活動のあり方を長く模索してきた。最終的に私たち学生による薪プロジェクトとしての活動は今年度末に収束させる見通しにまとめ、今後は個人での訪問を考えている。今年度後期はメンバーの長期留学により活動体制が十分に取れなかったが、今後も新たな活動を模索していきたい。</p> <p>(国際学部国際学科 学生)</p>
<p>アーカイブ活動 私たちは地域の歴史や文化を記録することで、住民の方々が地域への魅力を再確認し、復興の精神的な基盤になるのではないかという思いから活動している。今年は地域の伝統行事であるお祭りへの参加と「吉里吉里カルタ制作」をおこなった。お祭りを通して地域の方々とつながりができ、「若い人が減っている中で祭りが継続できるのは学生の力も大きい」という言葉を頂いた。カルタ制作では、大人も子どもも遊びを通して文化を共有できるものをめざし、これまで学生が収集してきた「吉里吉里人の語り」をもとに吉里吉里語辞典の編纂者と協力して制作した。軽快な吉里吉里語のリズムから、漁業が盛んだった震災前の生活や独自の文化を感じられるのが特徴だ。地域の方々からは、若い世代に文化を継承していく手段として期待の声も寄せられている。今後も、活動を通して得たつながりを生かし、地域にさらに寄り添って活動していきたい。</p> <p>(国際学部国際学科 学生)</p>	<p>スタディツアー 今年度は「東日本大震災から3年3ヶ月が経った今、学生にできることを考える」というテーマで、5月31日～6月1日の2日間でおこなわれ、計22名の学生が参加した。訪問先として、吉里吉里内にとどまらず、大槌の市街地まで足を運んだ。震災当時の状況やどのように歩んできたのかなど、様々な立場の方からお話を聞くことができた。盛り土の作業開始など復興に向けて順調に進んでいるように感じられる場面が多かったが、一方で地域の方の苦労も多く、まだまだこれからだと感じられる活動であった。こうしたスタディツアーを通して、より多くの学生に大槌・吉里吉里や東日本大震災、防災について知ってもらいたい。またこれをきっかけに学生がさらに復興の後押しをするとともに、自分たちの足元となる地域での防災への取り組みへと繋げていけるよう、努力していきたい。</p> <p>(国際学部国際学科 学生)</p>

大槌・大学文化祭 大槌町には、震災後 50 を超える大学、機関が支援や研究等の目的で関わっているが、町民はもちろん大学関係者も把握しきれていない現状があった。そこで、大学と大槌の方々の相互理解をする場として「大槌・大学文化祭」が 2014 年 8 月 31 日に中央公民館大会議室で開催された。当日は大学、研究室、機関が各ブースでそれぞれの活動について報告し、交流を深め、それぞれの支援活動・復興への思い、そして大槌の未来について語り合った。この文化祭をきっかけにして、東京大学教育学研究科の方たちが、明学生がおこなう「わんぱく広場」で活動するなど、確実に交流の幅が広がっている。震災からまもなく 4 年が経過する。これだけの団体が大槌で活動していたことを知り、各団体が一緒に活動を行うことで、大槌の未来は大きく開けると感じ、その第一歩目としてとても有意義な場であった。

(経済学部経営学科 学生)

大槌町・明治学院大学協議会 2014 年 2 月 14 日、大槌町・明治学院大学協議会が大槌町役場で開催された。大槌町と明治学院大学は、2012 年 3 月にボランティアに関する協働連携協定を結び、大槌町と明治学院大学が相互の協力のもと継続した復興支援活動が続けられるような体制を整えてきた。協議会では、これまで大槌町でおこなってきた私たちの復興支援活動の現状や課題を報告し、町役場の幹部とともに今後の活動を巡り話し合いを行った。本学の前田勝広ボランティアセンター長が「復旧から復興へと推移していく中で、活動が難しい段階にきている。しかし、必ずできることがある。原点に立ち返りたい」と語ったのに対し、碓川豊町長は「局面が変わっても、いろいろな支援の仕方がある。息の長い支援をお願いしたい」と応じ、町と大学側が連携を深め合うことを確認した。今後も地域に合わせた活動を展開していきたい。

(社会学部社会福祉学科 学生)

大槌町では、盛り土の工事が本格的に始まった。生活に欠かせない道路や店が閉鎖されるなど、不便になり、町の温かみも減ってしまっている一方で、復興も着実に進んでいる。活動に来るたびに風景は変わっているように私たちの復興支援活動においても変化が多かった。震災直後の様子を知る学生が卒業し、今後は 1、2 年生がリーダーとして活動をしていくことになる。しかし、3、4 年生のもつ地域との豊かな人間関係を 1、2 年生はまだ築くことができていない。今後、新たなメンバーが地域との関係をどこまで築いて、ニーズを理解しながら活動していくことができるかが、活動において大きな課題となっていく。まもなく 4 年目を迎えるこの活動は、より地域に合った活動を長く続けていくために、地域との関係性を大切にしていきながら、大槌町の未来を担う子どもたちへの支援を中心にした活動の再編成を行っていく。そして、行政や他団体との連携をさらに深めていき、団体の垣根を越えた柔軟な支援活動をしていきたい。

(学生メンバー 心理学部教育発達学科 学生)

## Do for Smile@ 東日本プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～ 気仙沼大島復興支援プロジェクト総括

気仙沼大島での活動は2011年夏、東北学院大学の呼びかけにこたえる形で「大学間連携ボランティアネットワーク」（以下大学間連携）による気仙沼市唐桑地区を拠点とした漁業支援・美術館における文化財再生活動等に参加したことをきっかけに大島の明海荘を拠点に継続されている。また、「大学間連携」も活動の幅を広げており、気仙沼唐桑地区を拠点とした支援活動に加え、仙台七夕まつりでも活動した。4月、復興支援活動としては初めての活動となる「第31回気仙沼つばきマラソン大会」（以下つばきマラソン）での出店のお手伝いをおこなった。つばきマラソンは観光の島である大島のイベントの一つとして地元新聞社が主催する参加定員1700名規模の伝統のある大会であるが、震災後2年間は中止された大会であった。2013年に第30回大会として復活し1748名が参加した。活動内容はスタートゴール地点となる大島中学校グラウンドで地元婦人会組織「母ちゃんず」が出展販売するおにぎりの準備と販売で、早朝5時から選手がゴールした昼過ぎまでおこなった。つばきマラソンには大島中学校の生徒全員が受付・誘導等にボランティアとして参加するなど、島の一大イベントの位置づけである。つばきマラソンのボランティア活動は2015年度も継続すべく準備を進めている。

筆者は大槌町での活動に関わるが増え、大島での引率はこの活動のみであった。気仙沼市内ではかさ上げ工事が本格化し、関係車両が行き交っている。大島では港のかさ上げと護岸工事が一段落し、港周辺は更地のままであるものの、学生の支援活動は人手と体力が必要な復興支援よりも、文化祭、運動会、夏祭りといったイベントや農漁業の収穫作業といった住民の生活支援にシフトしている。もともと若者は高校を卒業すると島を離れる傾向があり、こうした作業に対するボランティア需要は途切れることはないが、大学が組織だって学生を送り込む必要はあるのだろうか。島を自力で活性化させるために母ちゃんずのように自力で活動する力も必要ではないだろうか。今後は支援活動からの撤退を視野に入れた活動となり、それは大槌町、陸前高田市での活動にもモデルケースともなる。

一方、大学間連携では今年度も夏期に気仙沼市・南三陸町での活動に加え、「仙台七夕まつり」ボランティアに参加した。東北4大夏祭りの一つの七夕まつりでは仙台商工会議所が東北学院大学へボランティア募集を要請し、大学間連携を通じて多くの大学から学生が集まった。会場となった仙台市中心部は直接被災地を感じるものはないものの、被災した関係者もおり、気配りをしながらの活動であった。例年他大学の学生との横のつながりが生まれ、12月に東北学院大学で開催されたシンポジウムには、複数の大学の学生が声を掛けあい、大学の援助を受けずに参加した。

大学間連携では昨年度からネットワーク拡大に伴う事務局の輪番制について議論がなされている。しかし明確な方針は出されていない状況にあり、引き続き検討を重ねることになる。次年度の活動については、こうした動きの進展により左右されるのではないかと考えられる。 (波多野)

## 「Do for Smile @東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～ 気仙沼大島復興支援プログラム

### 【概要】

活動の目的

- ①多くの人に気仙沼大島という場所を知ってもらう
- ②震災について学ぶ
- ③震災に遭った人や地域を、「被災者」「被災地」として見るのではなく、活動を通してその人や地域全体や地域の今に目を向け、今自分たちに何ができるかを考える

2012年の夏から活動を始め今年で3年目を迎え、参加者は合計149名にのぼった。そのうち今年は2月から10月にかけて7回、延べ52名の学生を派遣して支援活動を行った。

また、11月には「Do for Smile@東日本」プロジェクト全体で明治学院大学の文化祭である白金祭に出店し、気仙沼ホルモンを販売し10万1200円を売り上げた。

### 【現地活動内容】

漁業・農業支援活動として2月に柚子農家の方の柚子の剪定のお手伝い、6月と9月には現地の方が所有している畑の収穫等のお手伝いをおこなった。また、中学校支援として2月、3月に学習支援を行った。

現地活動のイベントにもお手伝い等で参加し、4月に気仙沼大島で行われたつばきマラソンにおける準備に今年初めて参加させて頂いた他、9月に気仙沼大島で行われた大島神社秋季例大祭神輿渡り祭への参加、10月に大島中学校で行われた文化祭のお手伝いをおこなった。

また、その他に2月は柚子農家の方の敷地にあった津波の被害を受けた物の整理のお手伝いや担当別のニーズ調査活動の実施、3月には白金祭等の東京イベント活動に向けて気仙沼ホルモンについて現地の方に教えて頂く機会を設け、9月には漁業でお世話になっている方のリフォーム作業のお手伝いをおこなった。このような活動等を通し、地域の方との関わりを深め、地域活性化への貢献や他大学との交流をすると共に、震災当時の記録が展示してあるリアスアーク美術館訪問や、現地の方のふとした会話等を通し、震災当時のことを学んだ。

### 【まとめ】

東日本大震災から4年が経ち、活動当初と比べ建物等の復興は進み、津波で流された場所も雑草が生い茂り、「震災の痕」とははっきりとわかるものは少なくなってきたと活動に参加する度に感じる。それとともに、他のボランティアに会う回数も少なくなってきた。復興とは何か、地域やボランティアに参加する学生自身のニーズは何か。震災から時間が経つにつれ、それがわかりにくくなっている今、もう一度復興支援について考え直さなければならない岐路に差し掛かっているのではないかと感じる。今までの活動を見つめ直し、これからの活動について考えていきたい。

(学生メンバー 社会学部社会福祉学科)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～明学・気仙沼復興支援プログラム～ 気仙沼唐桑復興支援プログラム

### 【概要】

東北学院大学を中心とした大学間連携ボランティアネットワークが企画したこのプログラムには、全国の大学から約30名が集まり、本学からは3名参加した。8月7日～11日の5日間、民宿での共同生活ということで、協力しながらコミュニケーションをとることができた。活動日は3つのチームに別れ、それぞれ違う場所で活動をおこなった。気仙沼市だけではなく、南三陸町で活動したチームもあった。

### 【活動内容・感想】

一般財団法人気仙沼復興会（KRA）の方たちと共に清掃活動、本吉町蔵内漁港での漁業支援活動、牧沢仮設住宅支援、南三陸町内における復興イベント運営補助活動をおこなった。

KRAでの活動で訪れた場所はもともと道路で、津波の影響によりその上に砂が積もって海岸のようになった場所であった。海の中には崩れた防波堤が生々しく残っており、津波の威力の強さを物語っていた。砂の奥からは当時のものと思われる漁具が多数見つかった。漁具だけではなく人骨らしきものも見つかったということで警察の方も来ていた。落ちていたり埋まっているものを一括りに「ゴミ・ガレキ」と言う人がいるが、これらは「被災物」という現地の方の話が印象に残っている。

仮設住宅支援では草むしりと住宅訪問をした。訪問の際、私たちは最初どのように被災者の方とコミュニケーションをとればいいのか分からず戸惑っていた。そんな中、消防士の方がお話をしてくださった。その方いわく、ボランティアの数がだんだん減ってきているがこれからが必要な時期ということだった。さみしくて話し相手がほしいのか、病気でもないのに119番をかけてくる人が多々いるという。目に見える部分では復興は進んできているのかもしれない。しかし被災者の心は深く傷を負っている。そんな被災者の精神的な部分でのケアをボランティアが担っていく必要があるということだった。また、学生ボランティアの力は大きく、話をしているだけで元気をもらえると声を今回の活動中に何度も耳にした。

南三陸町内における復興イベントが行われた日はあいにくの雨であったが、小さな子どもからおじいちゃんおばあちゃんまで多くの方が訪れていた。ステージ上では地元の方々によるダンスが披露され、また沖縄出身のバンドのBEGINが曲を披露するなど盛り上がっていた。私たちも気軽にできるまちづくり活動の一つとしての「みんなの町民憲章 虹色イラストコンクール」に参加をした。このイベントを通して町民の方々は復興に向けて前向きに取り組んでいると感じた。

今回の活動を通して、現地へ行ってみないと分からないことがたくさんあるということが分かった。また1度だけでなく、何度も足を運ぶことも大切だと思った。

（学生メンバー 法学部消費情報環境法学科）

## 「仙台七夕まつり 2014」ボランティア

今年度の8月6日、7日、8日にかけて行われた仙台七夕まつりにてボランティアスタッフとして会場の運営をお手伝いするために明治学院大学の学生13名が参加した。東北学院大学の災害ボランティアステーションに滞在しながら、多くのメンバーが連日活動をおこない、会場の清掃、短冊記入コーナーでの呼びかけ、来場者の方のご案内、交通整備などを担当した。

短冊記入コーナーでは訪れる方々に呼びかけをおこない、沢山の方々に願い事を書いていただいた。途中小雨に降られながらも、現地のスタッフの皆さんと一緒に協力して活動をおこなった。短冊を書き、竹の一番高いところに結びたいと言う子どもを手伝ってあげた後に、家族で笑顔で記念撮影をして楽しげにイベントの中へと入ってゆく人々の姿を見て、わたしたちボランティアスタッフも活動のやりがいを感じ、楽しむことができた。

当初は、ボランティアスタッフの心得として、震災にあわれた方々への心の配慮を考えなければと思っていたが、実際にまつりに参加してみると、飾りは賑やかで、観光目的の方が多いこともあってか人々も楽しそうにしており、震災の記憶も内陸と、海に面している地域では違うのではないかなど、考えさせられることがあり、ただボランティアスタッフとして参加するだけではなく、被災地という場についても考える機会を得た。

日本3大七夕まつりの1つである仙台七夕まつりにスタッフとして携わり、復興について考える機会を得ることもでき、また文化にも触れることが出来た。関東から離れた地でありながらも、イベントの最中に明治学院大学を知っている方から労いの言葉をかけて頂くこともあり、別の地から来ている私たちを迎えてくれる人々の温かみを感じた。このイベントをきっかけに被災地について考え、またこのような機会があればスタッフとして活動したいと思う。



小雨が降ってきたため短冊を掛ける笹の袋がけ作業中

(学生メンバー 国際学部国際学科)

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～

【かわいい子には旅をさせよ 2014年夏 in 陸前高田】

2012年に初めて実施した、大学生とともに小学生4～6年生が陸前高田で震災について学び、ボランティア活動を体験すると同時に豊かな陸前高田の歴史と文化を学ぶ「かわいい子には旅をさせよ」（通称「かわ旅」）は、今年度も多くの方々の協力を得て、第3回目「かわ旅」を実施できた。企画・広報・実施にご協力くださった方々に、あらためて感謝したい。

今年度の「かわ旅」は、8月20日～23日に実施した。参加者は10名と、昨年度の30名から大幅に減ったことは改善の検討が必要だが、1・2回目の参加者から各1名のリピーター参加があったことは大変嬉しかった。「2年前に比べて違うのは、陸前高田の人々の目です」という観察眼にも驚いた。

今回新たな試みとして、陸前高田市役所で久保田崇副市長からお話をうかがった。また、味噌や醤油を製造する八木澤商店の河野通洋社長とともに、震災当日の足取りをたどる「津波避難訓練」を実施した（写真参照）。けが人がいる想定で他の子どもをおぶりながら、津波が来るまでの時間内に神社の階段を上ったことは、子どもたちにとって「あの日」を少しでも追体験できたのではないかと思う。



津波避難訓練で階段を上る

仮設集落「長洞元気村」でのボランティア活動（大根やほうれん草の種まき）や気仙大工左官伝承館訪問のようすは、地元新聞紙にも取り上げられた。

【大学生向け「スタディツアー」】

陸前高田、あるいは被災地に赴くのが初めてという学生も多いため、新メンバー獲得をめざすためにも、かわ旅と同様被災地見学や長洞元気村での交流なども実施している。かつては7万本あったといわれる高田松原復活のための松苗植林ボランティア活動などにも取り組んだ。

【2015年度の活動】

今後、津波の被害を大きく受けた地域のかさ上げ工事により、被災地見学のルート変更など「かわ旅」も変わるだろう。これから陸前高田の街並みや人々の生活の変化に、本活動も対応していくと思う。ほかにも、東京都や神奈川県での陸前高田応援関連イベントへの参画や学生が陸前高田訪問などの機会を増やせるようにしたい。

（中原）

## 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト～陸前高田復興支援プログラム～ 変化に入る陸前高田

今年で震災から4年が経つ。陸前高田の町並みも復興に向けて公営住宅の建設や土地のかさ上げに際して海沿いの道に土が高く盛ってある様子が目に見えて分かるようになった。一番の変化は、震災以前の街の中心部が巨大なベルトコンベヤー覆われていることだ。

そのなかで、8月に「かわいい子には旅をさせよ」と題した3泊4日のスタディツアーを行い、参加者の小学生10人と学生メンバー10人で共に陸前高田で震災について学んだ。今回で3度目の催行であるが、被災地見学や仮設集落の訪問に加え、津波避難訓練などが新しく活動に組み込まれた。精神・体力ともに削られる4日間ではあったが、現地の方々とふれあいに温かさを感じ、陸前高田に来て良かった、また来たいという思いを全員で共有できたと思う。参加者の募集人数は30名としていたが、最終的に10名と人数は満たなかった。しかしその分互いに切磋琢磨し、密に学び合う空間が出来上がっていた。それを実感したのはツアーから2か月後に白金校舎で行った「同窓会」、いわゆるツアーの振り返り学習会を行った時であった。これから自分の住む町でも減災についてどのように取り組むかを親子で考えてもらいたいと企画したところ、参加者のうち6組のご家族が参加され、「もし震災が起きたら」をテーマに持ち物やそれぞれが住む地域での避難場所を真剣に話し合った。親子で災害伝言掲示板の利用法を平日頃から使い方を練習していることを知り、同窓会で自分も初心に戻って減災を再確認した。非常に有意義な時間であった。

これらを現地でお世話になった方々に伝えたく、さらに「かわいい子には旅をさせよ」を継続するにあたりご意見をいただきたいと思い、12月に学生メンバーで再度訪問した。このとき、「変化する陸前高田を見ることで子どもたちの成長に新たな経験を吹き込むことができる」と後押ししてくださった方や「小学生たちが来てくれると孫に会った気分になるよ」と嬉しそうに話してくださる方がいることを改めて直に知ることが出来た。活動の励みになる言葉ばかりで、学生メンバーにも気合が入った。

今回の訪問で、陸前高田で生きる人とその魅力について冊子を通して大学を中心に多くの人に伝えるためにインタビューを行った。陸前高田で生活し働く人たちの様々な熱い想いに触れた貴重な訪問でもあった。加えて、東京の下北沢などで広田湾のわかめなどの名産品を売ったりする活動をしている方々にも会うことができ、新たなつながりを作ることもできた。

今後もこれらの活動を継続するために、陸前高田の状況に合った手段の選択と、この活動に関わってみたいという新メンバーの獲得についても考慮しながら、丁寧な関係づくりを意識してメンバーともに活動していくつもりである。今年も陸前高田の皆様、そして活動を支えてくださるボランティアセンターのスタッフの皆様大変お世話になった。大きな感謝の気持ちをお伝えしたい。

(学生メンバー 文学部英文学科)

## 「Do for Smile @東日本」プロジェクトに参加して

### 薪プロジェクトに参加して

現地 NPO 法人「吉里吉里国」の展開する「薪プロジェクト」の活動に参加させていただいた。薪プロの他にも活動期間中に現地の様々な立場の方にお話を聞く機会を得られ、貴重な体験となった。

頻発するトラブルと人員不足から復興計画遂行の困難さを吐露された方もいた。復興計画が弱者救済に重きを置き過ぎており、敏寄せが子どもに來ていると懸念される方もいた。産業を根付かせて経済的に自立した地域になることが大事と説く方もいた。立場も内容も様々で、大きく考えさせられた。

今後の活動については、大槌での活動を作り上げてきた継続参加者から新規参加者への活動の移譲、地元の方の求めるボランティア活動の変容など、まさにいまがターニングポイントに差し掛かっているようであった。学生たち自身も知恵を絞って主体的に活動の方向性を決定していく必要があると認識しており、大きな学びと感じた。総じてボランティア体験が学生にとって非常に有益であると感じた。

学生との共同活動は大きな楽しみであった。木こり気取りで薪を割りまくる私にある学生が「誰にも才能がひとつあるとしたら瀬尾さんは木こりの才能だ」と言ってくれたのは、今回の活動の個人的なハイライトだった。唯一の才能が今の仕事にあまり活かせるようにないのが残念でならない。

この活動は私自身にも大きな気づきの場となった。多くの若手職員が今後参加することを期待する。

(教務部学務教職課 瀬尾)

### 学習支援に参加して

主に数学や英語の授業に加わり、生徒が各自で問題を解く際に個別指導を実施した。昼休みには3年生男子とサッカーで親睦を深めた。最も貢献できたと自負するのは部活動である。野球部の練習に参加し、長時間ノックを打ち続け、実戦練習ではキャッチャーを守った。野球部員が9人しかおらず、日頃から実戦練習ができない問題に直面していたようだ。現地での最終日には、顧問の先生・部員から「新人大会が開催される日曜まで大槌にいてほしい」と言っていただき、野球部からとても必要とされていることを実感した。短い期間であったが、少しでも貢献できたことを嬉しく思った。

活動を通じて課題に直面することもあった。例えば、適正なボランティアの人数を派遣できていたのだろうか。私が参加した活動では、学生の参加人数が非常に多く、結果的に授業中にもかかわらず学生が時間を持て余すケースが散見された。ボランティア活動に参加したい学生が多いことはとても喜ばしいことではあるが、ボランティア活動はボランティアを必要とする相手ありきで行われるべきなので、参加人数を管理することも必要ではないだろうか。以上は私が感じた課題であるが、一緒に活動させていただいた学生たちは非常に熱心で、被災地の役に立ちたいという想いを持って行動していた。本当に立派な学生たちだったことを付記しておく。

(教務部学務教職課 田中)